

敬語行動の規定因に関する研究 (II)

廣兼 孝信*・高永 茂**

A Study on Determinants of Expressing for Politeness (II)

Takanobu HIROKANE and Shigeru TAKANAGA

Key words: 敬語行動 expressing for politeness, 対人認知 person perception, 社会的スキル social skill, 自己呈示 self-presentation

第一報告¹⁾では、敬語行動の規定因として相手に対する親疎の意識と敬語を使用しないことに対する容認期待について検討した。その結果、非敬語表現を使用すると注意されたり叱責されると思う相手に対してより丁寧な言語表現になることが確認された。その一方、相手に対する心理的距離（親疎の意識）と言語表現の丁寧さとの間にははっきりとした関連がみいだされなかった。この結果は、敬語行動が単に相手中心に実現されているものではなく、自己への返報も重要な動機となっていることを示唆するものであった。

本報告では、第一報において報告できなかった、相手に対してどのような印象を持っているか（相手のパーソナリティ認知）と敬語行動の関連についての検討を試みた。

廣兼 (1990)²⁾は、専門学校女子学生を対象として、学生が教師に対して敬語を使用している架空の状況を提示し、その学生が教師に対してどのような印象を持っているかというかを第三者の立場から評定させた。その結果、丁寧さの程度が高い言語表現がなされるほど、教師に対して親しみにくいという印象を持っていると認知される傾向がみられた。また廣兼 (1991)³⁾は、話しにくいと思う教師に対しては敬語を使用する学生が多いことを報告した。これらのことから、相手のパーソナリティの認知が言語表現の丁寧さと関連することが予想される。

方 法

被調査者 広島文化女子短期大学学生117名。

調 査 日 平成5年2月17日

調査内容

1) 言語行動の調査 本学の専任教師5人に対する仮定の発話場面（6場面）を設定し、その場面においてそれぞれの教師に対してどのように発話するかを自由記述で回答させた。

2) 容認期待の調査 5人の教師に対して非敬語表現を行う場面（3場面）を設定し、その場面においてそれぞれの教師がその表現を容認すると思うか否かを3件法で回答させた。

3) 心理的距離の測定 同心円を描いたメンタルマップとテーブルへの着席位置の2つの方法で測定した。

なお、1)～3)の実施方法の詳細は、第一報告を参照のこと。

4) 対人印象の評定 5人の教師に対してどのような印象を持っているかを評定させた。評定は井上(1987)⁴⁾が「教師像に関するイメージ調査」で用いた30の形容詞対から被調査者が判断しにくいと思われるもの（例えば、「音楽好きな－音楽嫌いな」、「民主的な－専制的な」など）を除いた24項目（Table 1 参照）を用いて7段階尺度（4段階は「どちらでもない」に相当する）で回答させた。

結 果

印象評定の分類 印象評定のために用いた24の形容詞対を分類するために、7段階尺度に1～7の数値を与

* 生活文化学科

** 教養教育

Table 1 印象評定のための形容詞対の直接オブリミン法による回転後の因子パターン

形 容 詞 対	因 子 負 荷 量		
内向的な－外向的な	-.88	.09	.07
派手な－地味な	.82	-.04	-.13
不活発な－活発な	-.82	.06	.05
明るい－暗い	.75	-.01	.28
非社会的な－社会的な	-.74	-.12	-.10
無気力な－意欲的な	-.72	-.22	.13
消極的な－積極的な	-.72	-.22	.08
陰気な－陽気な	-.68	-.02	-.32
若々しい－老けた	.55	-.03	.39
おもしろい－つまらない	.54	.09	.42
頼もしい－頼りない	.49	.45	.19
ふなじめな－まじめな	.10	-.79	.22
慎重な－軽率な	-.13	.76	.04
責任感の強い－無責任な	.16	.70	.04
熱心な－不熱心な	.38	.46	.07
清潔な－不潔な	.34	.40	.11
優しい－厳しい	-.18	-.07	.81
気が長い－短気な	-.20	.03	.77
やわらかい－かたい	.27	-.13	.60
親しみにくい－親しみやすい	-.39	.03	-.57
冷たい－暖かい	-.35	-.15	-.53
親切的な－不親切的な	.22	.40	.47
協調的な－独断的な	.25	.07	.44
年を感じない－年を感じる	.41	-.01	.42
因 子 名	活動性	信頼性	寛容性

え、585（被調査者数117×評定対象5）の回答をサンプルとして24の形容詞対間の相関係数を求め、この24×24の相関行列を入力データとして、主因子解法による因子分析を行った。因子の打ち切り基準を固有値1.0以上としたところ3因子が抽出され、これに直接オブリミン法による回転を施した（Table 1）。その結果、第Ⅰ因子では、「外向的な－内向的な」、「派手な－地味な」、「活発な－不活発な」といった形容詞対において因子負荷量が高いので、因子名を“活動性”と名付けた。第Ⅱ因子では、「まじめな－ふまじめな」、「慎重な－軽率な」、「責任感の強い－無責任な」といった形容詞対において因子負荷量が高いので、“信頼性”と命名した。第Ⅲ因子では、「優しい－厳しい」、「気が長い－短気な」、「やわらかい－かたい」といった形容詞対において因子負荷量が高いので、“寛容性”と命名した。

因子得点の算出 各被調査者が5人の教師に対してど

のような印象を持っているかを表す指標として、3つの因子ごとに因子得点を算出した。ただし、特定の教師に対する印象評定を全く行っていないかった3名のデータを除外したため、以下の分析は114名のデータについて行った。因子得点の算出は、各因子内の形容詞対での評定値をプラス・マイナスの方向性をそろえて合計し、その形容詞対の数で割るという方法で行った。すなわち、算出された各因子得点は、被調査者がそれぞれの教師に対して活動性の印象、信頼性の印象、および寛容性の印象をどの程度持っているかを表している。その際、当該因子への負荷量が0.50以上で当該因子以外の因子への負荷量が0.40未満という条件を満たさない形容詞対については因子得点の算出の対象としなかった。具体的には、第Ⅰ因子の「おもしろい－つまらない」、「頼もしい－頼りない」、第Ⅱ因子の「熱心な－不熱心な」、「清潔な－不潔な」、第Ⅲ因子の「親切的な－不親切的な」、「協調的な－独断的な」、「年を

Table 2 各場面の発話内容の丁寧さと相手に対する印象との相関関係

	相手に対する印象		
	活動性	信頼性	寛容性
場面 1 (N = 567)	.222*	.292*	-.035
場面 2 (N = 566)	.074	.214*	-.075
場面 3 (N = 557)	.169*	.180*	-.033
場面 4 (N = 559)	.311*	.285*	.089
場面 6 (N = 556)	.124*	.273*	-.013

*は、1 % の有意水準 (両側検定)

Table 4 相手に対する印象と心理的距離の近さおよび容認期待との相関関係

心理的距離の近さと容認期待	相手に対する印象		
	活動性	信頼性	寛容性
同 心 円 (N = 564)	.435*	.135*	.501*
座 席 位 置 (N = 561)	.266*	.184*	.429*
容認期待 1 (N = 567)	-.137*	-.399*	.245*
容認期待 2 (N = 568)	-.153*	-.431*	.223*
容認期待 3 (N = 568)	-.159*	-.426*	.242*

*は、1 % の有意水準 (両側検定)

感じない一年を感じる」の 7 つの形容詞対が該当したので、因子得点を算出する対象から除いた。発話内容の丁寧さと印象評定の関係 発話内容の丁寧さと相手に対する印象との間に関係があるか否かを検討するために、発話場面ごと(注)に発話内容の丁寧さの値と因子得点との間でピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、場面 1, 2, 3, 4, 6 で発話内容の丁寧さと活動性の因子および信頼性の因子との間に有意な正の相関がみられ、場面 2 では発話内容の丁寧さと信頼性の因子との間でのみ有意な正の相関がみられた (Table 2)。

また、5 人の教師を発話内容の丁寧さの平均値で順位づけし、これと因子得点の平均値による教師の順位との間で発話場面ごとにスピアマンの順位相関係数を算出した。その結果、場面 1, 2, 4, 6 では発話内容の丁寧さの平均値による教師の順位と信頼性の因子得点の平均値による教師の順位が全く同じであった (Table 3)。

心理的距離の近さおよび容認期待と印象評定の関係 まず、心理的距離の近さの指標として用いた同心円図による距離および座席位置による距離と因子得点との間でピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、

Table 3 各場面における各教師に対する発話内容の丁寧さの順と因子得点の順との相関関係

	相手に対する印象		
	活動性	信頼性	寛容性
場面 1 (N = 567)	.01	1.00*	-.03
場面 2 (N = 566)	.01	1.00*	-.03
場面 3 (N = 557)	.03	.90	-.01
場面 4 (N = 559)	.01	1.00*	-.03
場面 6 (N = 556)	.01	1.00*	-.03

*は、1 % の有意水準 (両側検定)

Table 5 各場面の発話内容の丁寧さと相手に対する印象との相関関係 (教師 D のデータを除いた場合)

	相手に対する印象		
	活動性	信頼性	寛容性
場面 1 (N = 453)	-.090	.153*	-.178*
場面 2 (N = 452)	-.192*	.116	-.209*
場面 3 (N = 456)	-.087	.051	-.128*
場面 4 (N = 446)	.097	.165*	.013
場面 6 (N = 444)	-.041	.213*	-.079

*は、1 % の有意水準 (両側検定)

活動性、信頼性、寛容性のいずれの因子においても有意な正の相関がみられた。次に、容認期待と因子得点との間でピアソンの積率相関係数を算出したところ、活動性の因子と信頼性の因子においては有意な負の相関がみられ、寛容性の因子とでは有意な正の相関がみられた (Table 4)。

教師 D のデータを除いた場合 第一報告で述べたように、教師 D に対する発話内容の丁寧さは 5 人の教師の中で最も高く、その一方で教師 D に対する心理的距離は他の教師よりも近く認知されていた。また、発話場面によっては、教師 D に対する心理的距離が近いほど発話内容が丁寧になる傾向もみられた。これらの結果は、教師 D が言葉遣いの指導なども含めた秘書教育を担当しているということが強く影響していると考えられる。そこで教師 D に関するデータを除いた 4 人の教師に関するデータだけで、発話内容の丁

注) 第一報告で述べたとおり、場面 5 では“何も言わない”や“本当の理由を言わない”という回答が多くあったため、本報告においても場面 5 を分析の対象から除外した。

Table 6 相手に対する印象と心理的距離の近さ
および容認期待との相関関係
(教師 D のデータを除いた場合)

心理的距離の近さ と容認期待	相手に対する印象		
	活動性	信頼性	寛容性
同 心 円 (N = 452)	.370*	.011	.500*
座 席 位 置 (N = 448)	.306*	.193*	.434*
容認期待 1 (N = 453)	.194*	-.288*	.350*
容認期待 2 (N = 454)	.223*	-.338*	.349*
容認期待 3 (N = 454)	.205*	-.311*	.360*

* は、1 % の有意水準 (両側検定)

Table 7 各場面の発話内容の丁寧さと心理的
距離の近さと相関関係
(教師 D のデータを除いた場合)

	心理的距離の近さの指標	
	同心円	座席位置
場面 1 (N = 449)	-.153*	-.055
場面 2 (N = 448)	-.219*	-.020
場面 3 (N = 442)	-.164*	-.047
場面 4 (N = 441)	.056	.033
場面 6 (N = 440)	-.130*	.023

* は、1 % の有意水準 (両側検定)

寧さと相手に対する印象との関係、心理的距離の近さおよび容認期待と相手に対する印象との関係、発話内容の丁寧さと心理的距離の近さとの関係を再度検討した。

1) 発話内容の丁寧さと印象評定との関係 発話内容の丁寧さと活動性の因子との間では、場面 2 で有意な負の相関がみられるだけとなった。また信頼性の因子との間では、場面 2 と場面 3 で有意な相関がみられなくなった。さらに寛容性の因子との間では、新たに場面 1, 2, 3 で有意な負の相関がみられた (Table 5)。

2) 心理的距離の近さおよび容認期待と印象評定の関係 同心円図を指標とした心理的距離の近さと信頼性の因子との間で有意な相関はみられなくなった。次に、容認期待とでは、活動性の因子との間でみられた有意な負の相関が、有意な正の相関に変わった (Table 6)。

3) 発話内容の丁寧さと心理的距離の近さとの関係 第一報告で述べたように、発話内容の丁寧さと心理的距離の近さとの間には有意な相関がみられなかった。これについても同様の理由から教師 D のデータを除いて再度検討を試みた。

その結果、場面 1, 2, 3, 6 において、同心円図を指標とした心理的距離の近さと発話内容の丁寧さとの間に有意な負の相関がみられた (Table 7)。

考 察

本報告は、教師に対してどのような印象を持っているかということがその教師に対する言語表現の丁寧さとどのように関係しているかを検討したものである。

その結果、「外向的」や「派手な」といった活動性に関する印象が強い教師や「まじめな」や「慎重な」といった信頼性に関する印象が強い教師に対して、より丁寧な言語表現を使用する傾向がみられた。活動性

と信頼性のどちらが言語表現の丁寧さと関連しているかについては、5 人の教師に対する発話内容の丁寧さの平均値の順位とその教師に対する印象 (因子得点) の平均値の順位との関係から、信頼性との関連のほうが強いと考えられる (Table 3 参照)。信頼性の印象は、他の 2 つの印象に比べて心理的距離の近さとの相関係数の値が (有意ではあるが) 小さく、容認期待との相関係数の値は大きい (Table 4 参照)。このことは、第一報告で述べたように、敬語行動が相手との親疎意識よりも自分の行為に対する相手からの制裁 (注意や叱責) の予測に規定されやすいことを示しているといえるのではないだろうか。

本報告における被調査者は、発達段階では青年期に位置づけられる。この時期の対人行動は個人的な方略だけでなく社会的ルールや規範に沿った方略をとり始める。しかしいわゆる社会人として生活するまでは、それらを完全に内在化することは難しいと考えられる。したがって、対人行動の重要なルールである敬語行動も、青年期の段階では相手から喚起される評価懸念が強い場合に生じやすいのではないと思われる。

また本報告では、言葉遣いの指導も含めた秘書教育を担当している教師 D のデータを除いた分析も試みた。それによって、これまで得られた結果とはかなり異なった結果が得られた。第一に、活動性の印象と言語表現の丁寧さとの関連がほとんどみられなくなり、1 つの発話場面 (場面 2) では有意な負の相関がみられた。すなわち、活動性の印象が強い教師に対してはあまり丁寧な言語表現を使用しない傾向がみいだされた。第二に、「優しい」や「気が長い」といった寛容性に関する印象が強い教師に対してもあまり丁寧な言語表現を使用しない傾向が 3 つの発話場面でみいだされた。第三に、活動性の印象と容認期待との関係も負

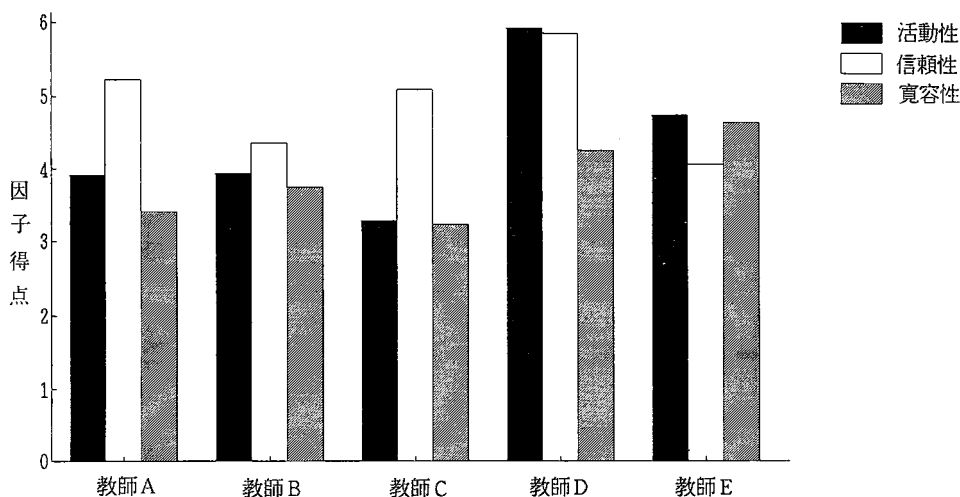


Fig.1 教師ごとの因子得点の平均値

の相関（活動性の印象が強い教師ほど非敬語表現を容認しないと期待する）から正の相関（活動性の印象が強い教師ほど非敬語表現を容認すると期待する）に変化した。第四に、これまで関連がみいだされなかった言語表現の丁寧さと心理的距離の近さ（同心円図を指標とした時のみ）との間に、負の相関が4つの発話場面でみられた。すなわち、教師に対する心理的距離が近いほどあまり丁寧な言語表現を使用しないという従来の予測に沿った結果が出たことになる。

教師 D は、他の教師に比べて、活動性、信頼性、寛容性のいずれの印象も高く認知され (Fig.1 参照)、心理的距離も近いと認知されていて、学生にとっては魅力的な存在であるといえる。しかしその一方で、非敬語表現に対する容認期待は低いと認知され（おそらく秘書教育の担当であるから）、そのため教師 D に対してはより丁寧な言語表現が使用されている。第一報告では、敬語行動が防衛的自己呈示（相手から否定的な印象を持たれることや制裁を受けることを回避するための方略）の一つである可能性を示唆したが、教師 D に対する敬語行動はそれだけではなく主張的自己呈示（相手に積極的に特定の印象を与えようとする方略）の中の「取り入り（相手から肯定的な印象を得るために相手の気にいる行動をすること）」として捉えることができるかもしれない。

Argyle (1992)⁵⁾ は、丁寧な言語表現が必要な状況として、1) 初対面などで相手とより親しくなりたいとき、2) 相手の自尊心を傷つける恐れがあるとき、3) 相手に

何かを要求するとき、4) 拒否する態度を示すとき、5) 失敗を詫びるとき、6) フォーマルな社交の場であるとき、をあげている。このようなときに丁寧な言語表現ができることは、主張的自己呈示であるし、対人関係を積極的に円滑にするための社会的スキルであると言える。

また、敬語表現能力の問題もある。今回行った調査において丁寧さのレベル 3（敬語表現がただ一つ）の言語表現が多かった。今回の調査からだけでは、被調査者がそのレベルでよいと思った結果か、もっと上のレベルの方がよいと思っていってもその表現しかできなかったのかわからない。もしより丁寧な表現をしたいと思っていっても言語として表現できないのであれば、言葉以外の手段（非言語的コミュニケーション）でそれを表現するかもしれない。したがって、今後の研究では、積極的な意味での敬語行動にも焦点を当てる必要があるであろう。したがって、敬語行動を言語表現だけに限定せず、非言語による表現にも注目して研究を進めていくことも必要であると考ええる。

引用文献

- 1) 高永 茂・廣兼孝信 1993 敬語行動の規定因に関する研究 (I) 広島文化女子短期大学紀要, 26, 21-29.
- 2) 廣兼孝信 1990 青年の敬語使用に関する研究 広島文化女子短期大学紀要, 23, 13-18.
- 3) 廣兼孝信 1991 青年の敬語使用に関する研究

(2) 広島文化女子短期大学紀要, 24, 9-13.

- 4) 井上正明 1987 教員養成系大学生による教師資質の評価 (I) -好きだった先生・嫌いだった先生のパーソナリティ特性の分析- 日本教育心理学会第 29回総会発表論文集, 588-589.
- 5) Argle, M. 1992 The social psychology of everyday life. Routledge.

謝 辞

調査にご協力いただいた学生および教師の皆様方に、心より感謝いたします。I・IIと続いた本報告が、学生がより適切に敬語を使用できるようになるための一助となれば幸いです。

Summary

This is the second paper on determinants of expressing politeness. The purpose of this study is to find out the relation between the system of polite expressions in Japanese, the speech style and the interpersonal impression from pragmatic and psychological perspective.

Interpersonal impression can be measured using a semantic differential method. Three factors are extracted using a direct oblimin method for factor analysis, namely 'activity', 'trustability' and 'tolerance'. Factor scores for each informant are calculated according to the three factors. The relation between factor scores and degree of politeness, and also the relation between factor scores and the psychological distance measured using a mental map method are investigated. And the relation between a degree of politeness and psychological distance is re-studied excluding the data for one teacher (named teacher D).

Degree of politeness and two factors ('activity' and 'trustability') are correlated each other, especially degree of politeness and 'trustability' have a strong correlation. 'Trustability' is also correlated to the expectation of hearers' toleration. The psychological distance and all of the three factors are correlated. As a result of re-study, a fact that degree of politeness and the psychological distance (concentric circles pattern) have a positive correlation is found. Also result shows that adolescents (informants) use polite expressions based on both a evaluation apprehension and the psychological distance.